

? 中東 1 イラン チャートルの下の多様性

著者	鈴木 均
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	88
雑誌名	「きもの」と「くらし」 : 第三世界の日常着
ページ	110-118
発行年	1993
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017844

IV 中 東



カイロ市内の通学風景（撮影：野村茂樹）

チャードルの下の多様性

鈴木均

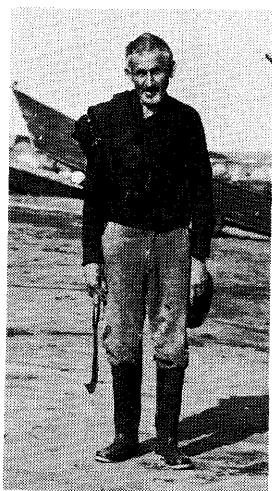
イランにおける服装の問題は、第一に宗教問題であり、また政治問題であり、社会問題であり、経済問題であり、さらにまた女性問題でもあるということができ、その意味でイランという国を地域研究の立場から理解するためのほとんど全領域に関わりのある大問題である。そして以上のすべての領域についてこの小論でバランスよく言及することは、筆者の能力をはるかに越えている。そこでここでは筆者の関心に引つ掛かった問題をトピックス的に取り上げるに留めたい。

イラン旅行者の

第一の関門

外国人がイランに旅行ないし滞在しようとする場合に、必ず知っておかなければならないことのひとつに服装上の注意がある。とりわけ女性の場合には気を付けなければならぬ注意事項が多く、イランに滞在しているあいだ中ずつとそのことに神経を使うのは、相当の精神的負担であることは否めない。

ここで参考までに、女性の服装に関する故ホメイニー師のファトワー（宗教的な教令）を紹介



カスピ海
北部、漁民
イランの沿岸

しておこう。これはイスラム教徒のみならず、イランにいるすべての女性に適用されている原則と考えていただきたい。ここではファトワーはすべて問いに対するホメイニー師の答えのかたちになっている。

I (問い) 婦人に対してイスラームのヘジャーブ (頭髮などを隠すかぶりもの) の必要な範囲はどこか。またその代わりに丈の長い自由な服装とパンタロンとルーサリー (髪を隠すための大きなスカーフ) を着ることは許されるか。原則的にいつて女性の服装、衣服について他人の面前においてはどのような注意が守られなければならないか。

(答え) 女性の体は顔の正面と両手の手首までを除いて、他人の面前ではすべての部分が覆われていなければならない。また前述のような服装は、もし充分な丈のものを着用するのならば問題ないが、チャードルを着用するほうがより望ましい。また他人の注意を引きつけるような服装は避けるようにしなければならない。

II (問い) ヘジャーブはイスラームにとつて必要なものであるか。それを否定するもの、また特にイスラーム社会においてこの神の命令を無視するものにはどんな判決が下されるか。

(答え) ヘジャーブ着用命令の基本はその必要性にある。またこの命令を否定するものは必要なもの否定者である。そして必要なもの否定者は、不信仰の判決を受けるものである。彼は明らかに神と預言者とを否定する者ではないか。

さらに以下のふたつのファトワーは直接女性の服装に関するものではないが、ヘジャーブの着用にも言及がある。

Ⅲ (問い) 現在女子が学校に行き、教育を受けることには問題があるか否か。また父親の許可が得られなかった場合にはどうすべきか。

(答え) もしヘジャーブその他宗教法上の義務を遵守するならば問題はない。ただし父親の同意を得た方がよい。

Ⅳ (問い) 婦人による自動車の運転にはどんな条件があるか。

(答え) ヘジャーブや宗教上の義務を守っているかぎり問題ない。

ここで注釈を入れておくと、ヘジャーブはイスラームの教義に従って人前で女性の頭髮などを隠すためのかぶりもの(ヴェール)で、黒や灰色のものが多く、被りやすいように頭巾型に縫製してあるものもある。ビー・ヘジャーブというと、頭に被り物をしていないという意味で、宗教的な禁忌を犯していることになる。

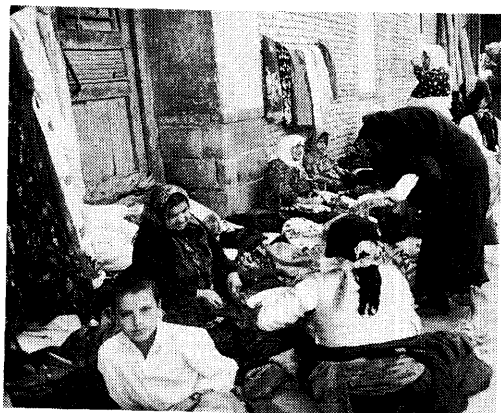
チャードルは体全体を覆う半円形の布で、色は黒のみ。ある意味で現在のイランを代表する女性の日常着であるが、普段着用して不自然でなく振る舞えるようになるまでには相当の熟練を要

する。チャードルには他にテントという意味もある。

ルーサリーは頭に被る大型のスカーフである。黒ばかりでなくある程度模様を施したものも着用されている。語源的にはペルシア語で「頭の・上」というほどの意味である。

以上紹介したホメイニー師のファトワーは現体制下のイランにおける絶対的な大原則であり、イラン国内にある人は皆この原則に従わなければならない。しかしこれはあくまでも原則である。この原則を受け入れているイランという国の社会的な前提を知らずにこれのみが情報として与えられれば、誰しもイランという国が全くの黒一色の世界だと誤解しても無理はない。

だがIのファトワーをもう一度読み返していただきたい。「他人の面前では」という但し書きがついていることに気が付かれるはずである。確かに外国人がイラン人と表面的にのみ付き合っているかぎりイランのこの強面こゝろもての側面しか知ることにはないだろう。だがイラン人との付き合いがひとたび始まるや、彼らの全く別の側面を垣間見ることになるのである。



女性用の古着を売るおばさんたち(コルドの町マハーバードにて)

イラン人は おしゃれ好き

イラン・イラク戦争終結後、とくに一九九〇年頃から就労目的で日本を訪れるイラン人の数が急増し、日本人にとってイラン人の存在が急に身近なものとなってきた。われわれが日常目にする彼らの姿が、ほぼテヘランなどで目にするイラン人の若い男性の姿である。もっとも現在のところ来日しているイラン人は女性の数が男性に比べて圧倒的に少なく、若者かあるいは中年の男性が大多数であるが。彼らの服装を見てもわかるように、非常にラフな格好をしている者が多いが、同時に（時には日本人でもちよつとかなわぬほど）おしゃれに気を使っていることがわかる。彼らにとって服装とかファッションとかは重大な関心事なのであり、たとえ就労目的で来日しているとはいえ決してなござりにはできない問題なのである。

試みに彼らのファッション・センスを一言で表現すれば、それは独特の「軽さ」ということになるのではないだろうか。テヘランの目抜き通りの服飾店を覗いてみると、若者向けの華やかなファッションが目を奪うが、それらは日本人の目から見ると一様に「派手」であると同時に「軽い」ものばかりである。

このような次第であるから、テヘランの若者のあいだにも当然流行というものが存在する。そして女性のみならず男性のあいだにも流行のあることを、筆者は一九九〇年の秋に「発見」した。秋も深まったある日、イラン人の友人に「今年の冬はセーターが流行っているよ」と言われてまわりを見ると、確かにテヘランの町に行く男性は皆あたたかそうなセーターを着込んでいるので

ある。

女性は外出時に隠さなければならぬ部分が多いだけ、わずかに垣間見える部分でのファッション・センスを競うようになる。例えばパンタロンやジーンズの下からのぞく靴下やストッキング。ルーサリーの柄。指輪や腕輪。このような細部にこそセンスの見せ所があると言わんばかりである。また同じルーサリーを被るにしても、テレビでの「おしん」ブーム以来前髪を高くしてルーサリーの下からちよつと覗かせる「オシーニー」という髪型が大流行したことは、案外知られていない事実である。

イランの革命前の写真を見ると、一九七〇年代には日本人にもなつかしいベルボトム・ジーンズが当時大流行していたことがわかる。欧米のヒッピー文化が当時イランなどの国にも大量に流入していたことを窺わせる。ちなみに現在では勿論誰もこのようなものをはいている者はいない。

地方文化にみる

日常着の多様性

だがこれはあくまでテヘランなど大都市の話であって、地方都市や農村部においてはまた別の側面に注目していく必要がある。それは非常に多様な地方性・民族性という要素である。

試みに筆者の知見の及ぶ範囲でイランの地方色豊かな服飾文化の一端を素描してみよう。まずエルボルズ山脈を越えたテヘランの北側、カスピ海南岸部である。ギーラーン州およびマーザンダラーン州の両州は共にイラン有数の米作地帯であり、そのためイランのなかでは例外的に女性が田植えなどの農作業に従事している。この地方の特に女性の働きやすい服装は、このような文



イラン南部フーズスターン州の町シーランなど異
シュで。袖口の形状などテヘランはまったく風通しが
で見かけるチャードルとはまた風通しが
なるもので、動きやすくまた風通しが
良いように工夫されている。

化的な背景を抜きにして
は考えられない。

つぎに西アゼルバイジ
ヤン州からケルマンシヤ
ー州にまたがって存在す
るコルド（アラビア語で
はクルド）の人たちの服
装も極めて特徴的である。
典型的な男性の日常着に
ついて述べると、幅がゆ

つたりと広く裾のすばまったズボン（パントール）をはき、特徴的な太い布の帯（ベシテンド）を
締め、体に密着した前開きの上着（キャヴァー）を羽織り、そして頭には布製の独特の被り物
（ペチ、あるいはメエザル）をしている。山岳地帯に居住する彼らの民族衣装は見るからに軽快で
精悍である。

イランの南部（フーズスターン州、ホルモズドガン州など）では、今度は一変してアラブの要
素が入ってくる。普通の女性の服装にしても他の地域とは微妙に異なるもの（手の部分が動きや
すくなっている）であるが、特にアラブの女性が顔に密着しない構造の風通しの良い顔覆いをし

て町を颯爽と歩いているのを見ると、いかにも南に來たという感じがしてくる。

イランの東の方（ホラーサーン州、シースターン・バルーチスターン州など）にいくと、アフガニスタンやパキスタンの服装をした者が目立つてくる。アフガン人も、イラン人とは一目で区別される服装をしている。アフガニスタンの政治的混乱が続くあいだ、イランに身を寄せている彼らの数が減ることはないであろう。

現在はマーザンダーン州の東部を占める、ゴンバデカーヴースやゴルガーンの周辺にはトルキヤマンの人たちが多く居住している。彼らの民族衣装も特徴的である。

このようにイランという国の広大かつ多様な風土に対応して、そこで生活する人々の民族衣装も極めて豊かな多様性を示しているということが、以上の簡単な紹介からだけでもお分かりいただけたと思う。

服装と政治

イランにおける服装と政治の問題として、かつてよく言われたことであるが、服装の選択がその人物の政治的な立場を反映する場合があるということがある。

特に男性の場合、現在のイランにおいて普通のイラン人が日常的にネクタイをして生活することは、多くの場合、自分が近代主義的なナシヨナリストの立場であることを意図的に表明しているということの意味する。

髭もまたその人がどの程度近代主義的か、あるいは宗教的かを暗示しているということができ

る。一般的にいつて口髭のみを残し、頬や顎の部分のをきれいに剃り上げてゐる人は近代主義的であり、口の周りのみならず頬や顎の髭もたくわえてゐる人はより宗教的であると考へて十中八九間違へることはない。いづれにしてもイラン人には毛深い人が多いのか、髭の良く似合う人が多い。またイランで生活してゐて髭をたくわえてゐない成人男性に出逢ふことはほとんどまれであるといつてよい。

さて前述したように、イラン人の多くは決して服装に無頓着ではない。これは都会から遠く離れた農村部でも同じことである。その彼らのうち、政治的、経済的と理由はさまざまでも少なからぬ数の者が多かれ少なかれ「本意」な服装を強いられてゐるとしたら、それはやはり彼ら自身にとつて不幸なことである。来日してゐるイラン人の青年がある日私にふとこんな言葉をもらした。「現在のイランでは、普通の人は日々の生活に追われていて新しく服を買う金もない。だからよく見かけるだろう、娘の頃着ていた服を今でも着てゐるおばさん」。

彼らが日常どんな格好をしてゐるかということは、どんな格好をしたいかということとはしばしば誤差がある。その誤差の部分も含めて、街行く人々の日常着をひとつの情報の発信源として眺めることは、地域研究者にとつて日常的に最も手近かにある情報源のひとつであることは事実である。

(すずき ひとし／アジア経済研究所地域研究部)